

特別講演Ⅲ

南米薬樹タヒボの魅力ーがんから骨までー

飯田 彰

近畿大学農学部応用生命化学科 教授

“タヒボ”は、南米アマゾン川流域に自生するノウゼンカズラ科 *Tabebuia avellanedae* の通称であり、インカの時代より、収斂作用や利尿作用をはじめ、様々な疾患に効果のある伝統薬物として利用されてきた。一方、近年の化学的、生化学的および薬理学的な研究により、本植物が、抗腫瘍、免疫賦活、抗菌、抗真菌、抗ウイルス、抗アレルギー、抗炎症、抗酸化といった多様な生物活性を示すことが報告されている。

演者の属する研究グループは、タヒボの生理機能の解明とタヒボの補完代替医療への利用を目的に、活性発現の化学的根拠となるタヒボの成分研究を行ってきた。その結果、抗腫瘍、抗菌、抗真菌、抗ウイルス、抗炎症に関わる成分を明らかにすることができた。また、最近、抗酸化活性に焦点をあてた活性成分の探索を行ったところ、抗酸化活性成分として単離された成分が骨吸収阻害活性を示すことが分かった。

今回、タヒボの抗腫瘍活性成分について紹介するとともに、最新知見である抗酸化活性成分の骨吸収阻害活性についても報告したい。

プロフィール

1983 年 京都大学薬学部製薬化学科卒業
1988 年 京都大学薬学部助手
1996 年 京都大学薬学部助教授
1997 年 京都大学大学院薬学研究科助教授
2006 年 高崎健康福祉大学薬学部教授
2008 年 近畿大学農学部教授（現在に至る）